

## 大賞（北陸枠） はやとさん（富山県 高校2年）

2015年、193の国連加盟国はSDGsという共通の目標を掲げ、持続可能な社会を目指す取り組みを始めた。かけがえのない地球に住む者全てが、幸せに暮らせる社会を目指して。達成目標の2030年までが、地球規模で共通のゴールを目指し行動する期間だとしたら、その先の2045年は、視点をグローバルからローカルに移す時であると思う。養ってきたSDGsの精神と積み上げられた英知をもって、各地域が抱える問題を誰一人取り残すことなく解決しようと地域住民全体が主体的に行動できる社会でありたい。

北陸地域は、少子高齢化、人口減少が加速している。私の住む富山県の人口は、約一〇三万人。減り続ける日本人に対して外国人は年々増加し、現在は約五十人に一人が外国人である。このままだと、2045年の外国人割合は今より多くなるのは確実で、それに伴い外国人の子供も増えるだろう。将来の多文化社会を支える鍵の一つは、子どもたちの教育にあると思う。北陸が共生社会の先進地域となるための私の考えを述べる。

とにかく日本人は平等を好む。物でも機会でも、同じものを一律に与えられることが平等だと考えがちだ。しかし、それは不平等でもある。与えられたものを使いこなす力には差があるからだ。日本語の理解が困難な外国人の子は、日本人と同じように日本語で勉強するのは容易ではない。私たちは、彼らの学びに寄り添っているだろうか。年齢や学年によって、ある程度の到達目標はあるが、そこに至るまでの過程は一人一人違う。個々の特性や能力に応じたきめ細かい教育を受けられることが、平等な学びの形だと思う。

デジタル技術の進歩は目覚ましく、教育分野のICT化も進んでいる。コロナ禍でオンライン化が加速し、教育は距離の壁を乗り越えつつある。であれば次は、言語の壁を乗り越えたい。いかなる言語にも対応でき、どの子にも理解しやすいデジタル教科書や同時翻訳ツールなどの開発促進が期待される。それらを活用し、日本語能力とは別の角度で教科本

来の能力や習熟度を測ることができるのが理想だ。また、学習以外にも自分の興味関心を追求できる場が増えるといい。好奇心を育み、失敗を恐れることなく挑戦する若者が増えると思うからだ。学びの機会は、言語や経済状況に左右されてはいけない。コロナ禍で苦難を感じている人、外国人、そして支援を必要とする人全てが希望を見出せる教育の形を今こそ考えるべきではないだろうか。

加えて、外国人の地域での居場所づくりや保護者の支援も欠かせない。遊びや趣味、地域の行事などを通して互いの言語や文化を理解し、悩みを共有し、緊急時には助け合える絆を育む場が地域にあることが望ましい。そのつながりが、地域の伝統文化や産業の担い手不足解消の一助になる可能性も十分考えられる。しかし、外国人と日常的に接点のある人はそれほど多くはない。中には関わりたくないとさえ思う人もいるだろう。その人たちの気持ちを受け止めながら共生社会を築くためには、SDGs を学ぶ私たち世代が親世代を巻き込む形で地域活動に取り組み、意識改革をすることが必要だと思う。不安に思うことは何か、どうすれば互いを受け入れられるのか。次世代を担う私たちのアイデアと行動力が今、問われている。

今を生きる私たちは皆、未来を支える大切な人材である。新しい平等の観念のもとで、子どもたちが国籍を問わず、個性に応じた教育を受けられる社会。価値観の違いを認め合い、安心して暮らせる社会。そして、誰にでも活躍のチャンスがある社会こそ、私の描く理想の社会像である。美しく雄大な自然に囲まれ、繊細優美な伝統文化が息づく魅力的な地、北陸。北陸が外国人に選ばれる地となるように、理想とする多文化共生社会が実現できるように、私はこれからも考え、行動していく。